

日本記者クラブ賞

中国と韓国との和解に取り組みたい

松尾 文夫

今回の受賞で改めて噛みしめているのは、「あの戦争を経験した最後の世代」に属する一人としての責任の重さである。そして、やり残した課題の大きさである。

父親が旧陸軍の職業軍人であったこともあって、私の人生の記憶は1936年2月、父の任地であった中国の山海関から、東京で急死した祖父の葬式に出席するため、母と一緒に船で一時帰国したときから始まる。2歳半であった。

小学2年生で太平洋戦争が始まり、その半年後の4月には、東京の



戸山でドーリットル初空襲を目撃した。5年生の3学期には父の任地の四国の善通寺でグラマン戦闘機の機銃掃射を逃れ、そして敗戦ひと月前の45年7月19日には、墳墓の地である福井市でB29、127機の夜間絨毯爆撃を奇跡的に生き延びる。

日米両首脳による相互献花のアイデアも、こうした私の戦争体験の中から生まれたと思う。

95年2月、ドイツのドレスデンで米英旧連合軍による爆撃50周年を弔う手厚い鎮魂の儀式が行われた。3万5千人というドレスデンの死者数に対して、日本に対する「夜間無差別焼夷弾爆撃」の皮切りとなった45年3月10日の東京大空襲の死者数は8万3793人。ドレスデンよりもはるかに多い。しかし、こうした日本流に言えば「お線香を上げる」和解の儀式はまだ行われていない。

ドレスデン和解のニュースに接して、私は福井の芋畑でB29の容赦ない爆撃にひたすら耐えた夜を思い出

し、強いショックを受けた。

これにこだわり続けた私は、10年後の2005年、米ウォール・ストリートジャーナル紙と中央公論に寄稿して、日米相互献花を求めるキャンペーンを始めた。11年たった昨年、この提案は多くの人々の支持を得、特にオバマ前大統領と安倍首相の「決断」も得て日の目を見た。

しかし、中国と韓国との関係は、和解とは程遠い。安倍首相のハワイでの「和解の力」演説では、なぜか東アジアへの言及はなかった。83歳で今回の榮譽に浴した私は、残りの人生を懸けて、この2つの隣国との和解の実現に、ドン・キホーテのように立ち向かいたい。

韓国との関係では、文在寅新政権が登場した今、日韓合意で決着したはずの従軍慰安婦問題の「再交渉」は避けられないと思う。中国での献花外交は、日本軍による中国人の虐殺数で日中の食い違いが大きい南京では時間が必要だとしても、日本軍の無差別爆撃によって1万人を超す死者が出たことは間違いない重慶への献花は、今すぐにでもできる。

そして私が強調したいのは、今の日本ではほとんど論じられることがない、韓国はもとよりフィリピンまで巻き込んだ日本とアメリカの東ア

ジアにおける歴史的な古傷である。

日露戦争終結のためのポーツマス会議が始まっていた1905年7月、アメリカのフィリピン領有を日本が認め、アメリカが日本の韓国併合を承認するという秘密取引が日米間で成立した。

この桂・タフト秘密協定に基づき5年後に実行に移された韓国併合が、その後の日本の中国への「帝国主義侵略」の出発点となり、やがてあの太平洋戦争となる歴史のアイロニーが、現在の日本ではほとんど忘れられている。

しかもアメリカには、併合に反対する韓国の必死の抵抗を無視したのみならず、独立運動を展開する「フィリピン革命軍」と4年間も戦い、フィリピン側に戦死者1万6千人を出した古い傷痕がある。

韓国の「約束違反」を口にするとき、忘れてはいけないのは、この歴史である。

まつお・ふみお 1933年8月12日、東京生まれ。学習院大学卒。56年共同通信社入社。ニューヨーク、ワシントン各特派員、バンコク、ワシントン各支局長、論説委員などを歴任。共同通信マーケティング社長を務めた後、2002年に68歳でジャーナリストに復帰。著書に「ニクソンのアメリカ」銃に献花する日「アメリカと中国」など。翻訳書に「ニクソン回顧録」などがある。